

大塚敬節
矢数道明

責任編集

世近
漢方醫學書集成

35 中西深齋

名著出版
刊



南京中醫藥大學圖書館版權所存

近世漢方医学書集成 35

中西深齋(一)

第II期
全30卷

昭和五十六年三月二十五日 発行

編者

大塚敬節
矢数道明

発行者

中村安孝

発行所

株式会社
名著出版

東京都文京区小石川三ノ木五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七二二四九四番

製版所

株式会社
日本写真製版社

印刷所

有限会社
伊藤印刷

製本所

辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

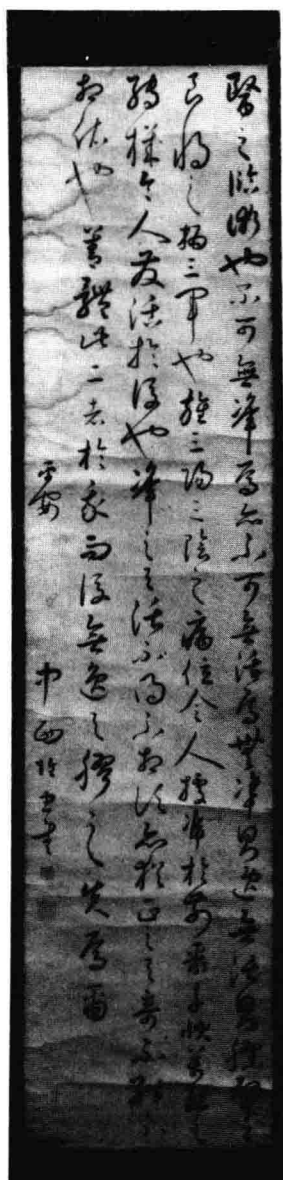
山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



中西深齋墨跡

凡 例

- 一、本書第三十五卷「中西深齋(-)」には、『傷寒論弁正』を収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
- 一、底本は次の通りである。
 - 傷寒論弁正 版本(寛政二年版) 六卷六冊(矢数道明所蔵)
 - 一、解説は、寺師睦宗(日本東洋医学会副会長)が執筆した。
 - 一、巻頭の口絵は、矢数道明氏所蔵・中西深齋墨跡によった。

中西深齋

寺師睦宗

中西深齋小伝

中西深齋は享保九年（一七二四）京都に生まれた。名は惟忠、字は子文、通称主馬、深齋と号した。もとは伊賀十八族の一家であったが、曾祖以後京都に住んだ。

深齋は若き時から学を好み、初め儒学を志して江戸に留学し、数年を経て京都に帰った時に、吉益東洞の古医方を唱うるを聞きて、志を翻して医学の道に入り東洞に師事した。時に年三十八の壮年であった。

深齋がいかに篤学の士であったかは、鶴田元逸が『医断』（本集成12巻に収録）の著述を業半

ばにして早逝した時、これを補筆したことからも察せられる。

東洞の『方極』（本集成12巻に収録）が世に出たとき、赤松愿が書を東洞に寄せて難詰したので、東洞は深斎をして代って答えせしめようとした。

そこで深斎は、先生の書は難解で世の誤解をまねく恐れがあるとし、もっと分かりやすい一書を著述せんと思念した。それには『傷寒論』の良き註解書が必要であると考慮した。

『傷寒論』は今を去ること千数百年の書であるため、文字は古くて簡略なるが故に読みづらい。歴代に多くの註家があつたが、その本筋を得たものは少ない。そこでこの『傷寒論』を註解し、師道を闡発（えんぱつ開きあらわす）せんと深斎は心魂をうちこみ、以後門を閉じ、客を謝し、一意攻究すること三十年を費した。

人々は「寂々寥々中西の居、年々歳々傷寒の書」と評したが、遂に『傷寒論弁正』『傷寒名数解』の二書を著述した。

張仲景祖述の難解な『傷寒論』の条文を弁証推例し、正偽を判裁し、考拠詳明末義小訓は細かに分析せず、大旨を推察し、治療の通規を得せしむよう註解した。『傷寒論』の真価はこの註解書により国内に伝誦されて、篤学の医家中西深斎の名は高く世評に上った。

近畿の諸藩は厚礼を以て迎えようとしたが、彼はみな固辞して就かなかつた。晩年はよく病んで常にしとねにあつて、日中は門下生に古医方の方論を講授することを怠らず、夜になれば三角

登寿院、小林愚溪、和田東郭などを招き医事を談じた。その間に従容として酒を数杯微醺するを楽しみとした。

享和三年（一八〇三）春みまかる。享年八十。墓所は東福寺莊嚴院（京都市東山区）で、恩師吉益東洞墓の向かい側に葬られている。

『傷寒論弁正』と『傷寒名数解』について

傷寒論の註解書でまず読むべきは、中西深齋の『傷寒論弁正』、と山田正珍の『傷寒論集成』、多紀元簡の『傷寒論輯義』（本集成41・42巻に収録）の三書であろう。

『傷寒論弁正』は六卷六冊から成り、深齋が「弁太陽病脈証并治法上」から「弁陰陽易差後労復病脈証并治法」までの各条文について解説を加えたものである。

本書を著述するため、深齋は客を辞して三十年間刻苦精励した。深齋独自の説が随処にみられ、オリジナルに富む名著であるが、漢文で書かれているため、『傷寒論集成』や『傷寒論輯義』



中西深齋の墓
（東福寺莊嚴院）

に比べて味読されていない。最近若き医学徒松本一男氏により『傷寒論弁正校釈』が刊行されたので、今後はこの弁正も広く読まれることと思う。一読をお薦めしたい。

深齋は『傷寒論弁正』のほかに、『傷寒名数解』がある。この書は五卷五冊からなり、寒五名、三陽三陰、傷寒中風、合病併病、冒首、疼痛、煩躁、消渴、瘀血、下利、日数、加減法、藏府三焦、榮衛、虛実、死生、三権、仁術、古今方などについて、深齋の見解を述べている。これは漢文であるが、訓点がついているので読みやすい。

この二つの著述は、傷寒論研究の経と緯であつて、前書が経（たていと）にあたり、後書が緯（よこいと）にあたる。

それでは深齋は、『傷寒論弁正』でどのように解明をしているか、二、三例をあげてみよう。

「太陽病」の標準は「惡寒」なり

先ず「太陽之為病、脈浮、頭項強痛而惡寒」の条文について、深齋は「太陽病」の重要症状である「發熱」については詳述しないで、「惡寒」のみを強調し、この惡寒が太陽病の標準だという。『傷寒論弁正』は次の如く解説している。

三陽三陰とは、表裏の統名にして外内の分なり。脈は浮を以て陽の候となし、沈を以て陰の候となす。

蓋し病は表の部位より起こり、是れを三陽となす。而して太陽は表の表たり。陽明は表の裏た

り、少陽は表裏に間すとなす。故に今、脈浮を以て太陽部位の診候となし、頭項強痛を以て太陽部位の証候となす。頭項強痛は、或いは頭痛み、或いは項強ばるを合して之を言うなり。

三陽は皆な是れ表の部位にして、熱を主とす。而るに今、発熱を措きてただ惡寒を言うものは、固より発熱を外にして、之を言うに非ざるなり。三陽の表の部位にありて熱を主とするや。その部位に随いて、熱の情状を同じうせざるなり。蓋し太陽にありては、則ち発熱・惡寒をその本位となし、少陽にありては、則ち往来寒熱をその本位となし、陽明にありては、則ち身熱・惡熱・潮熱・不惡寒をその本位となす。是において若し尚お惡寒すれば、則ちこれ太陽にありとなすなり。然らば則ちその太陽となす所以のものは、発熱にあらずして、独り惡寒にあるなり。

諸篇にありても、亦た往々にしてその太陽にあるや否やを論じて、「惡寒するものは、表未だ解せざるなり」と曰い、「惡寒せざるものは、外すでに解するなり」と曰うは、「惡寒」の太陽の標準となるを以てなり。是れその「発熱」を措いてただ「惡寒」のみを言う所以なり。

深齋は「惡寒」が伴わなければ「太陽病」ではない、「惡寒」が「太陽病」の標準であると言い、「而」の字に眼をつけよと提唱している。

「太陽の中風」について

次に「太陽中風、脈浮緊、發熱惡寒、身疼痛、不汗出而煩躁者、大青竜湯主之。若脈微弱、汗

出惡風者、不可服、服之則厥逆、筋惕肉瞤、此為逆也」の条文について。

此の条の「太陽の中風」については、古来よりいろいろと説がなされている。深齋は次の如く註解している。

「太陽の中風」と曰うは、蓋し二義あり。一は則ち桂枝湯の条に「太陽の中風」と曰うを承け、一は則ち後条に「傷寒」と曰うに對す。惟だ彼は則ち陽浮の最も輕きものを言い、此は則ち陽浮の最も重きものを言う。

乃ち今標して「太陽の中風」と曰うは、蓋し桂枝の証を承けて之を言う。「脈浮緊」より「身疼痛」に至るまでは、蓋し麻黃の証を挙げて之を言う。或いは既に桂枝湯を与うるも汗するを得ず、或いは既に麻黃湯を与うるも汗するを得ず。一はその輕きものより、一はその重きものより、亦た皆な此に及ぶを言うなり。故に今、「無汗」（汗なし）と曰わずして、「不汗出」（汗に不出でず）と曰う。その深劇、麻黃の証に過ぐるを見わすなり。況んやそれ且つ煩躁するおや、因りて「而」の字を加え、「煩躁」の全く「不汗出」にありて、或いは桂枝湯を与え、或いは麻黃湯を与うるの後より甚だしきを見わすなり。是においてか麻黃を倍し、石膏を伍し、以て之が力となして大青竜湯と名づけ、その汗を發し、その深劇の勢いを制するのみ。

或るひと曰く、『太陽中風』は當に『太陽病』に作るべし。是れ必ず伝写の誤り。許叔微、此の条を論じて曰く、『中風は寒脈を見わすものなり』と。然りと雖も『脈浮緊』以下は盡くこれ麻黃

の証にして、加うるに『煩躁』を以てすれば、則ちその最も重きものなり。何を以て中風の状を見んや。且つその方における、大青竜湯となせば、亦た已に力ありとなす。豈に復た中風の輕きを攻むべきや。桂枝湯・桂枝加葛根湯・麻黄湯・葛根湯・各半・二一の湯の如きは、皆な『中風傷寒』と曰わずして、『太陽病』と曰う。その脈証と方とを見るに、惟だその類を差うも、総べてこれ太陽の外に出でざるものなり。乃ち今、大青竜湯の如きも、亦た然らざるを得ず。又何を以て中風、之を標すること之れなすや。許氏、これらの義を弁ぜず、妄りに鼎立の説をなす。誤りと謂うべし」と。

これ或いは一説に似たと雖も、未だ必ずしも是ならず。許氏の妄説は固より責むるに足らず。唯だ「太陽中風」を以て桂枝の証となすの穩やかにして且つ優るるに若かざるなり。何ぞ更に「太陽病」に作りて之を説くこと之れ為すや。

按ずるに此の条は、一は則ち陽浮の最も重きものを謂いて、百変の転機は専ら此に本づくを見わすなり。一は則ち病重きものの極を謂いて、唯だにその間を促すのみならざるの重きを見わすなり。

此の解説からみると、深斎は「太陽中風」を是とし、「太陽病」を伝写の誤りとするように思えるが、果してそうであらうか。

和田東郭は『傷寒論正文解』で「中風」の二字を去り、「太陽病」とすべきであると、次の如く

述べている。

按ずるに此処の「中風」は、古来より註家種々に説あれども未だ何れも従い難し。独り条弁、「中風」の二字を去り、「病」の一字に更^かえ、「太陽病」の三字に作れり。宜しく従うべきなり。左なき時は「中風」の二字は甚だ差し支えあるなり。

この症は麻黄湯の一等重きものにして、即ち傷寒の劇症なり。喘の事は言わざれども元より喘もつよしと知るべし。故に方中、桂麻に配するに石膏を以てす。石膏は肌肉の熱を清肅し、且つ水気を鎮する主とす。「不汗出」とは麻黄湯を用いても、汗出でずという意なり。煩躁および脈浮緊以上の諸症、みな不汗出の故を知るべし。「不汗出」の三字、この章の眼目なり。「若脈」より「逆也」までの二十五字、後人の補入と見ゆ。宜しく刪り去るべし。「此為逆也」の下に「以真武湯救之」の字あり、心得おきて可なり。

(註)

「不汗出」と「汗不出」とは別である。「汗不出」（汗出でず）は全部否定で、汗が全然出ない意である。「不汗出」（汗にし出でず）は一部否定で、発汗せしめたが出ないの意である。ここでは麻黄湯で発汗せしめたが、汗が出ないという意である。

「柴胡加竜骨牡蛎湯の方名」について

第三として、「柴胡加竜骨牡蛎湯の方名」については、いろいろと異説がある。現在用いられて

いるのは『千金翼方』の薬方で、『傷寒論』の原方は不明である。

山田正珍は「小柴胡湯に竜骨牡蛎」を加えたものであるといい、和田東郭・白水田良は「大柴胡湯に竜骨牡蛎」を加えたものであると述べているが、中西深斎・宇津木昆台は「柴胡竜骨牡蛎湯」であると申している。深斎・昆台の説が最も妥当ではないかと思う。左に深斎の説を記述しよう。

按ずるに、方名の「加」の字は、疑うべし。蓋し「加」とは、もと本方に捩りて一二を増加するの義なり。乃ち今薬名を推すに、惟だこれ柴胡の類にありて、大小の柴胡に似ざれば、則ち柴胡桂枝乾姜湯の類にして、別に自ずから一方なるのみ。亦た何ぞ之を名づくるに「加」を以てするを之れ為さんや。

深斎は「弁正」を著述するのに、一字一句苟もせず校勘したと思われる。

たとえば「少陰病、身体痛、手足寒、骨節痛、脈沈者、附子湯主之」の条文においては、末尾に『千金方』を引用して次のように記述している。

按ずるに千金方に、桂枝甘草を加え、亦た附子湯と名づく。湿痺緩風、身体疼痛、錐もて刺し、刀もて割くが如き者を治すと。宜しく参考すべし。

また「傷寒本自寒下、医復吐下之、寒格更逆吐下、若食入口即吐、乾姜黄連黄芩人参湯主之」

の条文においては、深齋は「寒格とは、邪氣拒逆の義なり。これ蓋し後人の註する所、謬りと混ざるのみ」と解説し、

「下利、脈沈弦者、下重也。脈大者、為未止、脈微弱數者、為欲自止雖發熱不死」の条文は、「此れ蓋し王叔和の脈例にして、後人取りて之を此に補うのみ」と言い、

「下利、脈沈而遲、其人面少赤、身有微熱、下利清穀者、必鬱冒、汗出而解、病人必微厥、所以然者、其面戴陽、下虛故也」の条文においては、次の如く解明している。

此れ「下利清穀者」に至るは、蓋し四逆湯を謂うなり。「必鬱冒」以下の二句は、蓋しその既に四逆湯を服するの後、必ず此の如き^か状あるを謂うなり。所謂瞑眩なり、後世これを藥煩と謂うなり。「病人」以下の四句は、蓋しかの「面少赤」と曰うに因りて、その必ず当に微厥すべき、及びその然る所以の由を度るなり。義は乖^よかざるが如しと雖も、蓋し後人の四逆湯の後を継ぎし者、謬りて之を此に載するのみ。

『傷寒論』は簡易適切、照応含蓄な書であるが、二千年の歳月を経ているため、本文、追加文、註釈文、錯簡、誤字など入りまじっている。これを明確にしようとした江戸時代の漢方医家の註解書も、今日の吾々には難解と思わる箇所が多々あるが、一つ一つ読破して噛み砕いて行かねばならぬと思う。学問の道に王道なしである。

中西深齋
一